教育委員会会議の概要（令和６年６月定例会）

◆　日　　時　令和６年６月２８日（金）午前９時００分から午前９時５６分まで
◆　場　　所　教育局　第１会議室
◆　出　席　者

教　育　長	天 野　　元	出席
委員・教育長職務代理者	花 渕　　浩 司	出席
委　　員	川 又　　政 征	出席
委　　員	後藤　由起子	出席
委　　員	山 田　　理 恵	出席
委　　員	庄 司　　弘 美	出席
委　　員	長谷川　真里	出席

◆　会議の概要

１　開　　会

２　議事録の承認　　３月臨時会、３月定例会、４月定例会

３　議事録署名委員の指名　　長　谷　川　　委　員

４　報　告　事　項

（１）令和６年度仙台市標準学力検査及び仙台市生活・学習状況調査の結果について

（学びの連携推進室長　報告）

資料に基づき報告

長 谷 川 委 員　仙台市標準学力検査について、学年、科目、領域によって異なる結果が出ている。これを解釈するためには、例年、特定の学年の特定の領域で低いのか、または、その年だけ低いのか、という観点と、その学年の子どもたちが、１年前の同じ領域で同じように低いのか、という観点を見て初めて、何故この学年のこの領域が低いのかあるいは高いのかが分かる。今後分析が行われるということなので、現在の状況だけでなく、過去と照らし合わせながら、原因を推測出来れば良い。

学力と生活・学習状況調査結果との関係を調べていくという説明があったが、同じ年度で見るとあくまで相関であり、因果関係ではない。報告書などでは、これが原因

でこれが結果であると直接的には記載するのではなく、そのあたりについては慎重に記載していると思う。原因や結果を特定するには縦断的に見て、過去の原因がその次、あるいはそれ以降の年の結果に影響するという因果関係を特定しないといけいない。そのような意味で、分析結果を伝えるためのリーフレットの書き方を工夫していただきたい。現状のリーフレットは、まるで家庭でこのように対応すると学力や自己肯定感が上がるというように、極端に捉えられると、事実と異なってくると思う。もちろん、因果関係が特定出来ているのであれば別である。我々も結果を読むときに注意すべきであり、発信側としても、原因はこれであるなどのように強く書きすぎないように注意してまいりたい。

教　育　長　学びの連携推進室から東北大学加齢医学研究所と行っている研究の内容について説明いただきたい。

学びの連携推進室長　加齢医学研究所の先生方に仙台市標準学力検査のデータを用いて分析していただいている。我々が分析する際には、２～３項目についてのクロス検索ぐらいだが、加齢研究所の先生方は８～10 など多くの項目でクロス検索を実施し、分析を進めていただいている。その中で今回、家庭でコミュニケーションを図ってもらうために、リーフレットを利用しているが、前年度だけではなく、平成 27 年度にも一度同じようなリーフレットを作成しており、今年度のデータだけでなく、過去のデータも使用しながら検討を重ねている。学力が高まるという書き方をしないようにしているところであるが、様々な要因で子ども達の生活状況が良くなっていくということを周知していきたい。特にこのリーフレットの裏面の部分についてご家庭でもお願いしたいということで、広報をしているところである。いただいた意見を活かしながら検討してまいりたい。

後　藤　委　員　リーフレットについてだが、保護者目線として伝えていただきたいことが記載されていて、とても良いと思う。ただ、いろいろな家庭があるので、もしかしたら、この内容に違和感を持つ家庭もあるかもしれない。そのような家庭にこそ見ていただきたい。先ほど長谷川委員が発言したように、原因を断定するのではなく、感情に訴えるのでもなく、科学的な調査やデータの結果としてこのような結果が出ているということを端的に表していただきたい。そうするともしかしたら、リーフレット表面の「家庭にできることは何か、大切にすべきことは何か、改めて考えてみましょう。」という言葉は強すぎるかと思った。「何か」という言葉が２回出てきているが、例えばそれをなくすだけで、「家庭にできること、大切にすべきことを、改めて考えてみましょう。」となり少し柔らかい表現になると思う。これを出したときに否定的な意見もあるかもしれないが、しっかりと伝えていただきたい。内容については、いろいろな家庭の事情があるかと思うが、子どもの目線で見たときに、家の方に話を聞いてもらうことや、良いことを認めてくれるということは必要なことだと思うので、そこは堂々と伝えていただきたい。

花　渕　委　員　分析はまだこれからで、現時点の速報値ということかと思うが、学力の方で、何年生の何の教科が何ポイント落ちているという説明があった。この落ちている部分はどう対応するのか。前年度の学習であるため、今の担当している先生方が教える部分ではないと思うが、学力が落ちている部分をそのままにして上の学年に上がって行くのか、それとも落ちている部分についてはもう一度学習してほしいという働きかけをしていくのか。

学びの連携推進室長　今回結果が落ちているところは、前年度の学習内容でできなかったところであり、そこについてはこれから個人票が出てくるので、学校で子ども達と面談をして、この部分を取組んでいこうという話をしていく。さらに先生方は、例えば４年生の社会のこの部

分が、５年生の社会のこの部分に繋がっているということを知っているので、５年生で学習を進める際に、前の学年の振り返りを入れながら実施していただくようにしている。

花　渕　委　員　できなかったところが欠落したままでは良くないと思うので、そこは補充的な学習を入れていただきたい。学校で教えることなので、個人面談で指導するのではなく、一斉指導や宿題という形などで実施していただきたい。特に 10 ポイント以上落ちている部分については何らかの対策が必要である。

山　田　委　員　学年毎にデータを取っているので、多くの詳細なデータがあると思う。その同じ学年の子どもが小学校５年生から中学校３年生までにどうなっているのかということを見た方がよいのではないか。例えば正答率が落ちてくるのは、今を切り取るのではなく、小学校５年生から少しずつ落ちていているなど、どこから分かれ道となって落ちてきているのかというのは見た方が良いのではないかと思う。あと、12、13 ページが顕著だと思うが、12 ページの【7】や 13 ページの【10】【11】【12】【13】では令和６年の数値が高い。大体このような統計をとると同じような数値が出てくることが多いが、令和６年の数値がとても高い原因が分かれば教えていただきたい。

学びの連携推進室長　詳細な分析はこれからであるが、考えられることとして、【7】「学校では好きな教科の授業がある。」という質問について、令和５年は「国語・社会・算数（数学）・理科・外国語（英語）の中に、好きな授業がある。」という質問だったため、おそらく、好きな教科の中に体育や美術なども含まれることとなったため肯定的な回答の割合が上がってきたのではないかと考えている。また、13 ページの【12】【13】について昨年より大幅に上がっていることについては私どもも注目している。自己肯定感の部分が上がってきているのは、これまで自分づくり教育を進めてきた成果であると思っているが、まだ詳細な分析はできていない。今回やり方を変えているところもあるため、これから、加齢医学研究所の先生方と検討しながら原因を探っていきたい。

山　田　委　員　徐々に上がってきたわけではなく、令和６年が一気に上がっているのでおそらく何か原因があるかと思うので、そこは今後解明していただきたい。データがたくさんあるのでこれを今後どのように活用するのかはとても重要である。そこは加齢医学研究所の先生方とよく打ち合わせをしていただき、解析方法を決めていただきたい。

庄　司　委　員　リーフレットの内容は保護者やご家庭向けだと思うが、レイアウトや強調したい部分などの表現についてはもう少し工夫が必要だと思う。保護者向けのリーフレットだとしても、子どもたちも一緒に見れるような配慮があるとよいのではないか。例えば、子どもと一緒に話をして、お互いに反省しながら、リーフレットが会話のきっかけになるようなものだと良かったのではないかと思った。

学びの連携推進室長　令和５年度は保護者向け、令和４年度は子ども向けのものを作成し、授業で使った後家庭に持って帰っていた。毎年違ったものを作成して活用していたので、いただいたご意見を参考として今後も工夫しながら作成してまいりたい。

長 谷 川 委 員　リーフレットについては、家庭の立場で見ると、自分が悪かったのかなどと思ってしまうこともあると思う。学力が高い子どもであったら、話をしっかり聞いてもらえたり、子どもの方からも反応があったり、ほめるところもあったりなど相乗効果もあったりする場合もあると思う。リーフレットとしては、少し表現が強すぎる部分もあるため、マイルドにしていただきたい。また、全体的に抽象的な書き方になっていて、「大切な存在だ」と実感できるように関わるというのは具体的にどうしたら良いのか。具体的な例を記載す

ることや、子どもと一緒に見たときに一緒に楽しめるようなゲームが入っているなどきっかけづくりになる工夫があると良いと思う。例えば、「コミュニケーションを大切にする」と書いてあって、それは誰もが大切にしたほうが良いと思っているが、実際は子どもが言うことを聞いてくれない、反応がないなど、どうしたら良いのか分からないかもしれない。よって、全体的に表現をマイルドにすることや事例の記載、いますぐに活用できるようなものを掲載するなどしたほうが良いのではないかと思った。

川　又　委　員　仙台市標準学力検査で目標値はどのように決めているのか。

学びの連携推進室長　学力テストを委託している業者と調整をしながら決めている。具体的には全国で実施しているテストの結果の蓄積やモニターでのプレテストの実施などから目標値を設定している。

川　又　委　員　仙台市の昨年までの検査結果の平均や調査を行う側の判断などからではなく、業者が自動的に設定しているということか。

学びの連携推進室長　業者が目標値を最初に設定したあと、仙台市の方で問題の確認などを行い、意見交換をして目標値を調整している。

川　又　委　員　生活学習状況調査などのアンケートに関して、様々な質問があり、従来から実施しているのでこれから変えるのは難しいとは思うが、教育をする側からみて、小学生や中学生としてこうあってほしいという願望があまりにも質問の内容に出すぎているのではないかと思う。中学生くらいになると質問の意図を推測してそれに沿って答える学生もいるのではないかと思う。ほとんど全ての内容が大人からみて子どもはこうあってほしいという問いかけをしている。こちらの要望を隠しながら質問を作ることもできると思うので、今後そのような工夫もしていただきたい。

学びの連携推進室長　質問事項については昨年から大きく見直したところである。今回は、新規の質問内容もあるので、経年変化なども分析しながら見ていきたいと思う。

教　　育　　長　リーフレットについては、役所が作成する最大公約数的な難しさもある。委員の皆様の意見を伺って、ターゲットなどをどのようにしていくか今後工夫していくことが必要であると思った。また、データの読み方については、各委員から意見があったように、コーホート的に追跡して読んでいくことが重要であることや、大きく数値が上がった理由などについて社会的な理由があることなども考えられるため、宮城教育大学や加齢医学研究所の先生方と科学的な分析をしていくことが必要だと思う。

５　付　議　事　項

第 10 号議案　　仙台市学校給食運営審議会委員の委嘱等について

（健康教育課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

第 11 号議案　　文化財の指定に係る仙台市文化財保護審議会への諮問について

（文化財課長　説明）

資料に基づき説明

原案のとおり決定

６　閉　　会